

# 哲學研究

第七十三號

第七卷  
第四册

## 社會と個人

西田 幾多郎

或人は現在の社會その儘を直に倫理的價値の顯現であるかの様に考へ、或人は之に反し倫理的價値の基を全然個人の要求に求めやうと務め、社會と個人との關係は倫理學上大切な問題と思はれるのであるが、單に多くの個人の集團たるが故に社會が倫理的價値を生ずる筈もなく、又心理學的個人が直に倫理的價値の基礎となるのでもない。所謂社會と云ひ個人と云ひ共に知的對象の世界に映されたる心理學的實在の區別に過ぎない。倫理學上眞に意義ある根本的對立は存在する物の間の區別ではなくして、自然と自由との對立でなければならぬ、論じ詰めれば作用と對象との對立と云ひ得るであらう。社會に對してそれ以上の權威を有する個人は心理學的個人ではない、所謂個人の心の奥に潜める自由の人格でなければならぬ。かゝる

人格的内容の發露として改革者も道德的價値を有することができるのである。斯く云ひ得るならば、眞に道德的價値を負ふものは身體に結合する自我ではなく、一瞬一瞬に於ける自覺的行爲でなければならぬ、時の上には一瞬々々に跡方もなく消え行くと共に時を超越して永遠に現在なる自我でなければならぬ。此自我より見て、所謂個人と社會との區別は同一の平面上に於ける圓の大小の差に過ぎない。

我々の自己は一方に於て認識對象たる自然に屬すると考へられると共に、一方に於て直に絶對自由の意志に結合して居る、ベームの様、汝の立つ處行く處皆天ありと云ふことができる。心理學者も我々の意識は衝動より始まると云ふが、單に與へられた感覺の如きものでも、具體的感覚としてはその背後に超越的或物を認めざるを得ない、單なる手の運動の意識の如きもの、背後にも、分析し盡すとのできない超越的或物がある、有限の中に無限を藏するといふことが意識其者の本質でなければならぬ。而して此の如き超越的或物が顯現的となつた時即ちそれが自覺的となつた時、我々の思惟作用となると考へることができる。斯くして我々の思惟が自然の立法者と考へ得るのである。併し思惟作用に於ては、我々の自己は尙對象に束縛せられて居る。我々は思惟の對象界を超越することによつて、始めて創造的なる自

由我の世界に入ることができ、道徳的義務の世界に入ることができ。而して感覺的經驗の背後に既に思惟の内容が含まれて居り、感覺的經驗は之によつて成立すると考へ得る如く、思惟の對象界の背後に人格的内容が含まれて居ると考へることができ、知識我の根柢に意志我があると考へることができ。我々の經驗界は純粹自我の統一によつて成立すると云ふが、實在界を構成する自我は何處へかの傾向を有つて居なければならぬ、何等かの目的を有つて居なければならぬ、斯くして唯一の實在界が構成せられるのである。「時」が圖式として實在界を構成すると云ふが、「時」は何の方向かへの流でなければならぬ、然らざれば空間との區別はない。「時」が想像作用の形式であるとすれば、圖式「時」を形式とする想像作用は受働的想像作用ではなくして能働的想像作用でなければならぬ。實在の構成作用としての能働的想像作用は却つて所謂抽象的思惟の判斷作用を含むと考へることができ、後者よりも前者が一層具體的な立場と考へることができるのである。而して意志は此の如き能働的想像作用を素材として之を統一する最高の立場である。無限なる能働的想像を統一して之に唯一の方向を與へるものは意志である。心理學的に考へても、意志決定の場合には我々は先づ能働的に種々の場合を想像し、意志は之を選択し決定す

るのである。能動的想像作用は意志の一部分と云つてよい。斯くしてその統一によつて實在界を認識すると考へられる純粹自我の根柢に、知識我を超越して却つて之を含むと考ふべき自由我を認めざるを得ざるべく、而して此の如き超越的意志の立場が既に感覺的經驗の背後に含まれ居るものとして、我々の意識はすべて自由意志の立場に於て成立すると考へることができらう。感覺的經驗と結合することによつて知識が眞の客觀性を得ると考へられ、事實的知識が思惟以上の權威を有すると考へられるのも之によるのである。現前の事實が非合理的として絕對の權威を有すると考へられるのは、所與的材料としての偶然性によるのではない、絕對自由の自我自らの限定なるが故である、自己自身の奥底なるが故である、非合理的なるが故ではなく超合理的なるが故である。現實は絕對意志が自己を映す焦點であり、歴史の進み行く道筋である。現實に與へられたものは動かすことができないと考へられると共に、我は唯現實に於てのみ自由と感じられるのは之によるのである。現實に赤きものを青しと云ひ暑きものを寒しといふことはできないであらう。併し我々は現實に於て何處までも赤きものゝ中に自己を求め、暑きものゝ中に自己を求めることができらう。赤きものゝ青からんことを欲し、熱きものゝ寒からんことを

願ふものも自己ではあるが、赤きものを赤しと見、熱きものを熱しと感ずるものも亦自己自身に外ならない。自己の矛盾を意識することは、同時に統一の可能を意味して居る。現實に於ける自己の無限なる自由を證明して居るのである。

某年某日某處に生れ、如何なる容貌と如何なる性格とを有し、如何なる發展を成し、如何にして死するといふ如き自己は、考へられた自己である。此の如き考へられた自己は、その知識對象たる點に於て他人の自己と異なる所はない。唯、之を他人の自己と區別する所のものは、此の如き時間的現象の背後に於ける個性的統一と、現實に働きつゝある自己との内面的連結に外ならない。此の如き場合に於ける内面的連結とは何を意味するか。それは知る者が知られるものであり、働く者が働かれる者であり、知ることが働くことであり、働くことが知ると云ふことでなければならぬ。眞の自我の立場に於ては、客觀的對象が直に主觀的作用となり、主觀的作用が直に客觀的對象となるのである。空間時間を超越した自我は、抽象的概念に過ぎないのは云ふまでもないが、自我は一面に於て時空の世界に屬すると共に、一面に於て空間時間を超越した永遠なる理念の世界に屬すると考へられねばならぬ。自我の特殊性は一般を内に含む特殊性である。我々の自己は如何なる對象界をも自己の中に含み、無

限に深く自己の中に入り行くといふ意味に於て、超越的である。具體的自我は意識一般の立場を自己の中に含んで居るのである。此の如きことは論理的には矛盾であるかも知らぬが、此の如き矛盾が我々の意識成立の條件であり、自我の本質であるのである。殊特を離れた一般には生命はない、一般を離れた特殊にも生命はない。特殊と一般と相觸れる所に眞の生命があるのである。特殊の中に一般を含む時、それは自ら發展するものとならねばならぬ、即ち意識的とならねばならぬ。内面的に矛盾すればする程、意識が明となると考へることが出来る。我々の自己意識は唯超越的意志の自己實現點として生ずるのである。この故に何處までも特殊であり現在である。我々の自己は意識一般の對象界に生れるのではなく、意識一般は自己發展の過程に過ぎない。ヘラクライトスが夢に於て各人が各人の世界に還ると云つた如く、我は物の世界に、生れるのではなく、我は先づ夢の世界に生れるのである。各人に共有なる客觀的世界は却つて抽象的主觀によつて成る非實在的世界たることを免れない。我々は何時でも現實の意志を中心として實在界を考へて居るのである。

道德は通常、我と汝との間にのみ存すると考へられるのであるが、私は我と我との間にも道德的關係といふべきものがあると思ふ。私が他人に對して義務責任を有するが如く、現在の私は私自身に對して義務責任を有すると思ふ。我々が我々の祖先に對し、我々の子孫に對し責任を有する如く、現在の自我は過去の自我に對し、未來の自我に對し道德的責任を負はねばならぬと思ふのである。我々が認識對象界を超越し、自己自身に於て自由となることによつて、換言すれば意識一般の立場を内に含み、無限に創造的となることによつて、始めて道德的立場の上に立つことができる、即ち道德的意志の對象界に入ることができる。道德的意志の世界は云ふまでもなく自由なる人格と人格との關係の世界である。自由なる人格は他の自由なる人格を認めることによつてのみ、自ら自由の人格となることができる。而して此の如き人格的關係は所謂個人的自覺の意識の中に於て既にその基礎を有すると思ふ。我々の自覺的意識に於ては、一々の作用が純なる作用の連結として、働くことが即ち知ることであると云ひ得る如く、我々が現在に於ける自己を自由と認める自由意志の意識即ち自由我の意識の根柢には、無限なる自由意志の人格的關係がなければならぬと思ふ。意識の根源には道德的社會があるといふことができる。我々が單なる

知覺的意識の立場にある時、思惟の立場は現れて居ない。動物の本能的生活といふ如きものは單なる知覺的意識の連続とも見られ得るであらう。併し或作用が發達して居らぬといふことゝ、それが本質的に含まれて居らぬといふことゝは同一でない。如何なる知覺的意識であつても、意識は衝動的と考へられる如く、理想的なるものを含むと考へざるを得ない。意味即實在は意識成立の條件である。而して此の如き意味の自覺が思惟である。併し思惟は自ら働くものではない。思惟の根柢には之を動かすものがなければならぬ、即ち意志がなければならぬ。意志は思惟を動かすものである。意識現象は自動的なることによつて、即ち意志を根柢とすることによつて、自然物以上に深い實在性を有することができるのである。苟も精神現象が精神現象としてそれ自身の實在性を有するには、縦へそれが衝動的意識の如きものであつても、その根柢に自然科學的因果律に分解するとのできない人格的或物がなければならぬ。我々の意識は自らの中に始まり自らの中に終るものでなければならぬ。此處に意識の獨立と自由とがあるのである。而して此の如き意味に於て意識の中心となるものは現在の自由の意識であつて、某年某日に生れ、某年某日に死する自己ではない。意識現象は特殊なればなるだけ一般をその中に含むといふこ

とができるのである。

我々の時々刻々の意識を一々自由なる人格の作用として、所謂個人的意識の根柢に一種の社會的組織を考へ、此の如き立場からして所謂個人的意識内の關係と個人と社會との間の關係との間に絶對的區別がないと考へるには、多くの疑問を生ずるであらう。併し如何なる考が自己の意識と他人の意識と全く性質を異にするものと考へしめるのであらうか。我々は自他の區別を常識に於て考へられる如く、單に身體の空間的區別に求めることのできないのは云ふまでもない。單に意味其物の立場から見れば、我々は直に他人の思想感情と直接結合し得ると考へられると共に、二重我の現象に於て見られる如く一つの身體に二つ以上の我を有することもできるのである。若し純粹に心理學的に自他の意識の區別を求むるならば、我々は之を自己同一の内面的感情に求むるの外はない。併し自己同一の感情の本質が普通の心理學で考へられる様に、有意的行爲に伴ふ有機感覺の如きものならば、如何にそれが不變と思はれるにしても、それは單に類似の強度に過ぎない。本質的に何處にも自己同一を見出す事はできない。斯く考へるならば、眞の自己同一は如何なる意味に於ても、所謂現象界に求める事はできない。「汝は爲さざるべからず故に能くす」と

いふ道德的當爲の上に於てのみ、始めて眞の自己同一の本質を見出し得るのである。此の如き信念は知識の立場からしては單なるポストチユラートといふの外はなからう、唯我々に直接なる自由の意識によつて自證し得るのみである。而して所謂知識といふのも此立場によつて確立し得るのであらう。ポストチユラートといへば人爲的と考へられるかも知らぬが、我があるといふポストチユラートはすべての客觀的知識の根據となるのである。此立場に於て我々は時間空間の區別を超越すると共に認識對象界に映されたる自他の區別を超越すると考へねばならぬ。所謂個人的意識は全然繼續的であつて一瞬の前にも還ることも不可能と考へられるが、社會的意識に於ては獨立の意識が共存的であると考へられるであらう。併し單に對象化せられた意識内容から論ずるならば、我々は想起によつて自由に過去の意識を想起すると考へ得るであらう。又我々が二つの意識内容を比較し判断する時、我々は二つの意識を並列的に見ると考へることもできる。一つの意識といふことを如何に定義すべきかは困難なる問題であるが、意識を精神的複合物の連結といふ様に考へれば、個人的意識に於て二つの意識の共存を考へ得るのであるが、意識現象は如何なる場合に於ても綜合的全體として一つであるといふ考へよりすれば如何なる場合にも二つ

の意識の共存といふことは許し得ない。要するに我々の意識は多即一なる活動概念 *Aktualitäts Begriff* によりて成立し、意識が何時でも一であるといふのは意識成立の範疇に基く論理的形式的要求であつて、自然科学的に認識し得べき經驗的事實ではない。經驗的事實としては唯類似あるのである。従つて經驗的には我々は反省せられ對象化せられた意識内容の雑多と、その全體を包容する一つの共通的内容を見るのみである。而してかゝる立場からしては所謂個人的意識と社會的意識との相違は物質的に身體が別であるといふの外、單に統一の程度の區別を認め得るに過ぎないではなからうか。我々は普通に或個人が意識して居るといふ時、その背後に一つの精神的統一が働き居り、二人の人々が話して居る時、此の如き統一がないと考へるから、個人的意識と社會的意識とは全然その性質を異にすると考へるのであるが、所謂經驗的對象としては、個人的意識の背後にもかゝる統一はないのである。それでは、認識對象となることのできない而も我々の意識成立の根柢となる我々の自我はカントの所謂純粹自我の如きものであるかと云へば、若し此の如きものであるとすれば、我々は單に一般的な自己を認めるの外なく、各人の自我の區別は全然無くならねばならぬ。唯超自然的統一たる自己の實現即ち超越的因果律 *Transzendentale Kausal-*

splitといふ如きものがあつて、始めて個別我を認め得るのである。我々の個別的自我の概念は一に自由意志の信念に基くのである。之を離れて自我の唯一性の根據を論理的に求めることはできないのである。此故にライブニッツのモナットの様に自他が互に窓なき唯一の實在性を有し、相對立するには、當爲を本質とする意味即力の世界がなければならぬ。個性的統一によつて成る歴史的實在の世界の如きものがあつて、始めて眞に各自の自我の唯一的實在性が考へられ得るのである。然らざれば單に類似的なる精神現象と超越的なる一般的價值とあるのみである。個性といふのは對象化することのできない無限の當爲の統一であつて、此の如き個性の世界は、當爲の當爲たる道德的アプリオリの立場に於て成立し得るのである。個性的實在があつて道德的要求が起るのではなく、却つて道德的要求があつて個性的實在の世界が成立し得るのである。

右の如く考へるならば、獨立の人格的實在として人と我とを區別するものは、自我の意識は同時的に對立し、自己の意識は時間的に連結するといふ如きことではなくして、或理想的内容の實現の可能の範圍でなければならぬ。而して此の如き自由の中心は何時でも現在の自由意志にあるのである。我々は他人の自己に對する如く

過去の自己に對し自由を有せないのみならず、未來の自己に對しても自由を有せない、未來の自己に對する自由は現在に於ける自由の決心あるのみである。之に反し我々は道德的示唆によつて内面的に他人の自己を動かし得ることも考へることができる。それでは、此の如き世界に於て自他の關係は如何に考ふべきか。道德的世界に於てはカントの所謂、目的の王國に於ての様に、各人が互に自由なる獨立の實在となればなる程、互に相結合するのである。各人格が唯一獨立の實在となること云ふことが各人が互に一つに結合することである。而して私は道德的社會を構成するところ考へられる此の如き道德的アプリアオリが、既に個人意識成立の基にあると思ふ。我々は普通に自覺のない意識といふ様なものがあると考へる。例へば衝動的意識や知覺の如きものは自覺のない意識と考へられる。併し衝動的意識といふ如きものは未だ個人的意識ではない、單に個人意識を構成する材料たるに過ぎない。かゝる意識内容はその統一點の異なるに従つて、誰の意識材料ともなり得るのである。二重人格の現象に於て見られる如く、一つの經驗内容が二つの人格的中心に結合せられるのである。我々が自覺の伴はない衝動的意識の如きものが既に個人的であつて、或一個人に屬し他に屬せないと考へられるのは、意識其者の内容によつて考へる

のではなく、その背後に考へられる個體的統一によるのである、物の統一に依て心の統一を考へるのに過ぎない。縦へ、それが本能といふ如き目的的统一であるとして、尙外から加へられた統一に過ぎない。此點に於ては我々が經驗内容を統一するため、その背後に物方を考へるのと異なる所はない、共にその統一は他の自覺者によつて外から與へられたものである。我々の經驗内容は自己の中に内面的統一を見出すことによつて、即ち自覺することによつて、獨立唯一なる個人的意識となることのできる、自己の統一を自己によつて與へることができるのである。斯くの如くにして始めて或一個人の意識は他の個人に屬することができぬといふことができる。普通には我々の自覺の意識といふのは知覺的意識に加里來る如く考へられるのであるが、私は意識内容が自覺することによつてその全體の意味が變らなければならぬと思ふ。此の如き考から我々は單なる概念的自覺よりも、藝術的直觀の如きものに於て一層深い自覺に達し得ると考へることができ。藝術的直觀の如きものが、知覺的意識と同様の意味に於て、非自覺的とか無意識とか考へられるのは誤である。後者に於ては、我々は概念的自覺の立場を越え之を内に含み得るのである、眞に自由  
私の自覺に達し得るのである。此の如き自由私の内容として我々の意識内容は藝

術的表現に於て見る如く、一あつて二なき個性を得るのである。嚴密に云へば何等かの意味に於て主觀を内に含まない意識はないと云ひ得るであらう。所謂衝動的意識の如きものであつても、それが單に客觀化せられた内容でなく、それが意識現象であるかぎり意識一般の立場が内在的であるといふことができる、個性化への方向を含んで居ると考へることができる、此點に於て根本的に自然現象とその性質を異にして居る。併し衝動的意識の如きものは主觀を内に含むとしても、單に一般的主觀を内に含むのみである、多くの個性的人格への發展は唯之を潜在的に含むまでである、未だ抽象的一般的主觀の内容に過ぎない。本能によつて働きつゝある動物の意識の中には、唯種族我が働きつゝあるのであつて、未だ個性我といふべきものはない、動物には未だ魂といふべきものはない、尙一般的にして抽象的なる意識たるを免れない。此の如き意識を直に唯一と考へるのは前に云つた如く外から加へられた考に過ぎないのである。所謂概念的自覺に至つて始めて我々の意識内容は或一個人に屬して他に屬することのできないものとなるのである、眞に意識一般を内に含むといふ意識成立の根本義を顯現するのである。普通には衝動的意識の如きものから自覺的意識の如きものが發達する様に考へられるのであるが、即ち一般的なもの

のから特殊なものが出て來る様に考へられるのであるが、ベルグソンが物質界は精神界より或物を減じたものであると云ふ様に、衝動的な意識現象といふのは眞に獨立なる個性的な意識現象から或物を減じたものと云ふことができる。かゝる意識現象は物質界といふ如き一般的主觀の對象界が存在すると同様の意義に於て存在するといふことができるまでいある。

是は私の意識であつて他人の意識ではない、他人と私とは互に窓のないモナドであるといふ様な個人的意識の考は、互に獨立自由なるが故に互に一であるといふ道德的立場に於て成立し得るのである。而して個人的自覺の伴はない意識は嚴密なる意味に於て意識ではないとすれば、我々は我々の意識成立の根柢に於て道德的社會があると云ひ得るであらう。我々の一々の作用と作用との間にも、汝と我との關係が含まれて居ると云ひ得るであらう。我々の一々の作用が毫も對象化せられないで、即ち知識の對象界を通らないで、直に自由に結合すればする程、意識は明となるのである、内面的に矛盾なればなる程、意識は明となる。フイテの事行といふ様な、作用が働くことによつて直に自己自身を知るといふ眞の自覺は、道德的立場に於て可能である。互に獨立なる作用の自由なる内面的結合が我々の自覺の本質である。

我々の個人的自覺の奥底に於ける自由なる作用の内面的結合は、内に獨立なる自由の對象界を構成すると共に、外に道德的社會を構成するのである。後者は前者の延長に過ぎない。自覺なき衝動的意識は、縱へそれが空間的に分れて居るとしても、一つの種族の意識と見るの外はない。唯物論的立場を取らない以上は、意識内容其物の統一によるの外はない。眼のない動物が進化して眼ができた時、唯一つの種族的自我が彼等の眼を通して物を見て居るのである。今日の我々でも、自覺的意識なくして唯單に物を見て居る時、個人的自己が見て居るのではなく、種屬我が見て居るのである。各人によつて異なる種々の視覺の差異も、唯一つの大なる視覺の流れの種々なる象面に過ぎない。唯我々は此の如き種屬我の立場から進んで一々の自我が目的其者となる事によつて、即ち道德的立場に進むことによつて、一々の視覺作用も人格的内容を帯び來り、一々の視覺的映像が個性的となることができ、茲に藝術的創作作用が起つて來るのである。すべて精神内容が自己自身を實現するには一般より特殊に行かねばならぬ、特殊化すればする程、具體的實在となる、具體的一般者は特殊の中に一般を含むものでなければならぬ。我々の意識はその一般的なる方面に於て、多くの他の意識と結合する、即ち種屬的であり、衝動的である。併し精神的

なるものに於ては、即ち眞に具體的なるものに於ては、ベクルグソンの所謂一瞬の前にも返ることのできない流動であつて、一般的なるものはその反省の方面に過ぎない。物體現象としては、一般的なればなる程、實在的であるが精神現象としては、特殊なればなる程、實在的である。我々は普通に思惟の立場からして一般的なるものが特殊化するを考へるが、抽象的一般より特殊なるものは出て來ない。眞の具體的實在は特殊の中に一般を含むものでなければならぬ、自ら動くものでなければならぬ。コージェンの所謂生産點の如きものでなければならぬ。タルドは「社會的法則」に於て社會的現象の起源を論じて次の如く云つて居る *ainsi, en résumé il est certain que tout vient de l'infinitésimal, et, ajoutons-le, il est probable que tout y retourne. C'est l'alpha et l'omega.* Tout ce qui constitue l'univers visible, accessible à nos observations, nous savons que tout cela, procède de l'invisible et de l'impenétrable, d'un rien apparent, d'un sort toute réalité, inépuisiblement. Et, d'autant plus inexplicable que nous aussi, comme tout être, nous sommes destinés à rentrer prochainement, par la mort, dans cet infinitésimal d'où nous sommes sortis, dans cet infinitésimal si méprisé—qui pourrait bien être au fond, qui sait? tout l'au delà vrai, tout l'asile posthume, vainement cherché dans les espaces infinis……。

所謂社會現象なるものはタルドに従へば模倣によつて生ずる

と云ふのであるが、常に社會現象のみならず、自然現象といへども、その根柢はかゝる特殊の經驗の外にない。模倣の基礎たる共同的意志の立場から意識一般の立場に入る時、所謂自然界なるものが成立するのである。模倣の立場は尙人格的と云ふことが出来るが、意識一般の立場に於ては、プランクの云ふ如く全然擬人主義から解放せられるのである、それだけ又全然創造性を失ふのである。我々が普通に所謂個人的意識と共同的意識との間にその實在性を異にするかの様に考へるのは、外から見る故である。我々の精神現象は特殊より出でて特殊に還る、特殊なるものがそのアルプスでありオメガである。精神現象は時間空間の形式によつて外から區別せられるものでない、唯その抽象的なる具體的なる、創造的なると被創造なる、自由なると必然的なるによつて區別すべきである。同時存在的なる共同意識に比して、個人的意識がその連続的統一たる點に於て、眞の實在性を有すると考へられるのは、その創造的なるが故である、創造的なるものは連続的でないならばならぬ。我々の意識は個人的にせよ、共同的にせよ、所謂時間空間を超越した立場から働くのである、云はば時間空間の統一點から働くのである。ベルグソンの云ふ如く空間と時間とは純粹持續の弛緩と緊張との兩面に過ぎない、所謂共同的意識は弛緩的なるが故に同

時存立的と考へられるのである。

純粹意識の立場から云へば、我々が普通に考へる様な、自然科学的意味に於ての他の區別は、本質的區別ではない。我々の意識はその根柢に於ては自己の中に自己を寫すといふ自覺の形式によつて成立し、斯く自己の中に自己を寫す一つの作用は、他に同様に獨立自由なる無限の作用を豫料するといふ意味に於て、自他相對立し結合せねばならぬ。此意味に於て個人は一つの社會といふことができ、又社會は一つの個人といふことができる。若し自然科学的分析の立場から云へば、我々の現在の意識も單一とは云ひ難かるべく、若し歴史學立場から云へば社會的意識も分析すべからざる一つの綜合的全體にして、作用が直に作用を生み、連續的なる一つの意識的實在とも云ひ得るであらう。恰も所謂個人的意識内容が現在の意識といふ一點に於て相觸れ相争ひ、新なる人格的内容が構成せられ行く如く、種々なる社會的意識内容は或個人の意識に於て相觸れ相戦ひ、新なる社會的意識内容が發展するのである、且つ個人に於て或思想感情が自我の内容として中心的地位を占め創造的作用を營む如く、社會に於ても或個人が種々なる社會思想の焦點として創造的職務を取るののである、かゝる人が即ち所謂天才である。個人的意識に於て種々なる表象が互に無

體系に結合して居ない様に、社會的意識に於ても各個人的の意識は無體系に結合しては居ない。個人的意識に於て、例へば判斷に於ての様に、二つの表象が互に相對立すればする程、内面的に相結合する如く、社會的意識に於ても相互の自覺的獨立は却つてその内面的に深い結合を示すものである。個人的意識の場合に於ての様は、社會の各個人相互の獨立自覺はその社會的意識の深い自覺的統一を示すものである。而して此の如き精神の自覺的發展が客觀的精神の世界となる、所謂文化發展の世界がそれである。我々の純なる自覺的意識に於ては、意識一般の立場を内に含むことによつて、客觀界は自己の中に溶かされ、此立場から見れば、對象化せられた自己と他人とは同様である、我々は自由に自他に出入することができる。客觀的價值を實現する現在の作用即ち自由我の働く所には、自他の區別はない。純なる道德の立場からは、他人を愛敬すると同じく、自己をも愛敬せねばならぬ。宗教的立場からは兎に角無意義に他の爲に自己を犠牲にするのも道德とは云はれない。單に他人の爲にすること又社會の爲にすることのみが道德ではない。他人も社會も單なる存在としては何等の道德的價值も有たぬ。社會的實在が我々の上に道德的權威を有するのは、客觀的價值の表現としてでなければならぬ。社會的精神も所謂個人的精神と

同じく事即行なる自覺的精神である、大なる人格の表現として價値を有するのである、單なる多數は道徳上何等の權威をも有たぬ。或個人が大なる人格的價値を荷ふ時、多數を犠牲にすることも許せないことはない、ニーツェの貴族的道徳にも相當の理由を認めねばならぬ。唯、時間と空間との内面的統一たる具體的一般者が自己を顯現するに當つて、その直接の發展の傾向が個人的であり、その根柢に還る方向が自己合一の方向である、敬と愛との方向である。而して勿論反省即發展たる自覺に於ては、深い主觀に還ることは直に大なる自己の發展でなければならぬ。智識の立場からは、我々に直接に現れるものは個人的意識であるかも知れぬが、自由意志としては我々は、何時でも自己の合一の立場から働くのである。此の如き意味に於ける自己合一の立場即ち絶對我の立場は智識の立場に於て考へられる、如き一ではない、無限の個性化を豫想する一でなければならぬ。藝術に於ての様に無限の個性化はその統一を明にする所以である。

現在の自由意志の立場から云へば、我々の自我は對象界に映することのできない作用其者として、心理的なる自己の區別を超越し、何人の自我に對しても同一である。

正義の感は之より生じ來るのである。併し全然對象界に對して無關心なる即ち全く對象と關係のない自己は抽象的自己たるを免れない。眞の自己は働く自己でなければならぬ。而して自我が働くには、自我の方向があり個性がなければならぬ。單に見る自我には個性といふものはないが、働く自我は個性的でなければならぬ。個性は行爲的自我に於て意義を有するのである。而して働くといふことは自己が自己の對象界を創造することに外ならない。若し對象界を離れて自他に無關心となることが自由であるとすれば、我々の自我は一般的なる知的自我の中に入つて没却せられ、個性我は虚幻として宇宙に唯一つの神の眼が光るのみであらう。バンテイズムの立場から個性の世界は出て來ない。個性の世界を理解するには、我々はカントの「目的の王國」の如き世界から出立せばならぬ、而して我々の經驗界をばすべて道德的社會の表現として見なければならぬ。併し單に形式的なる目的其者から個性は出て來ない、自我の内容的區別は出て來ない。具體的個性に於ては内容自身が直に當爲でなければならぬ、内容其者の中に無限の當爲を藏して居なければならぬ。個性は内容を離れて自由となることではなく、内容の中に深く入ることである、内に超越し行くことである。眞の道德的世界は各人が深く自己の中に沈潜し、所

謂共同の世界を突破し盡した所に現れ來るのである。此の如き世界から見た時、我々の經驗界は始めて互に越ゆることのできない個人的主觀に分屬すると考へられるのである。而して又純眞に此立場に入り込み、此立場から此世界を見た時、此世界の事々物々が人格的内容の表現として互に人格的に相結合すると考へられるのである。法律の世界の如きものもその一端である。

上に論じた如く、普通に考へられる様な單に個人の團體といふ如き社會は、心理的個人と同じく、我々の認識對象界に屬し、我々の自由なる人格に對して、その材料となるのみであつて、その規範となることはできぬ、存在價值を有するのであつて、道德價值を有せない。自由なる人格的發現は唯時々刻々の自由なる現在意識にあるのみである。此點から見れば社會も個人も同様である、所謂社會的内容も、個人的内容も、同様に現在の自由の意識に於て創造せられるのである。所謂個人的意識も種々なる表象の結合として、一つの社會と云ひ得る如く、我々の認識對象界に於ては嚴密なる意義の個人といふものはないと云ひ得るであらう。我々の個人といふ考は自由なる人格の意識即ち道德的意識に基くのである。或は單なる知識的自覺即ち所謂

意識統一といふ如きものから、個人といふ考が出て来る様に思はれるかも知らぬが、純なる意識の統一といふ如きものは意識一般の如きものであつて之から個人的區別は出て來ない。それでは如何にして道德的自覺から、我々の經驗界に於ける内容ある個人的意識の區別が出て來るであらうか。我々の具體的にして自由なる自我は單に形式的自覺ではない、單なる知識的自覺ではない、無限なる作用の作用である、我々は見んと欲すれば見、聞かんと欲すれば聞く、坐せんと欲すれば坐し、行かんと欲すれば行く、此處に我々の眞の自由がある。非合理的なるものゝ合理化が眞の行爲的自由である。此立場から見れば理性といふのはその手段に過ぎない、意識一般とは意志發展の過程に過ぎない。單に自己が自己を省る、省る自己と省られる自己と同一であるといふ知的自我ならば、尙個人的自我ではない。眞に唯一獨立なる個人的自我は自己自身を限定するものでなければならぬ。自己反省の背後には自己を反省する前に、作用と作用との直接がなければならぬ、純なる作用と作用との結合がなければならぬ。此の如き思惟的自覺以前の自覺があつて、思惟的自覺はその一面として現れ來るのである。行爲的自由といふものがあつて始めて眞の自己がある。行爲的自由といふことは思惟以上の偶然性を意味して居る、反省の達することので

きない深い奥底を豫感せしめる。此の如き對立を超越し、此の如き立場を自己の中に含み得た時、我々は眞に自由である。是故に我々の自由意志は思惟の統一よりも深くして且つ廣い時には思惟の統一をも破り得るのである。我々の自己は必ずしも意識的に連續しない。然るに我々は自己を忘れて居た場合に於ても、後から我が働いて居たといふことを確信するのは何に依るのであるか。我々の自己は反省せられない純なる作用の連續であり、作用の無限なる自己限定たることを意味して居なければならぬ。藝術的創作に於ての如き所謂無意識的なる意識統一はかゝる立場に於て成立し得るのである。省られる者と省る者と一であるといふ自覺を表はす語は、かゝる純なる作用の連續の概念的言表に過ぎないのである。自己の意識があつて自愛が起るのでなく、寧ろ自愛があつて自己意識が起るのである。論理的當爲の意識の基には倫理的當爲の意識がなければならぬ。我々が純なる作用の内面的連續の立場に到る時、そこには物も心もなく、唯一つの生命あるのみである。物とか心とか、内とか外とかいふ區別は此立場によつて云ひ得るのである。此立場はすべての對象界を含み、之を成立せしめるといふ意味に於て意識一般の立場であり、妥當の意識であり、互に内面的に自覺獨立せる作用の直接の結合として積極的には

純眞なる愛である。純眞なる愛は唯、一である、そこに自愛もなければ、他愛もない。我々が自己の根柢に達すれば、それが自愛であり、又他愛である。自愛と他愛とは一つの作用の兩方面に過ぎない。右の如き純眞なる愛の立場は知識に對しては意識一般の立場となり、行爲に對しては道德的當爲の立場となるのである。ヘーゲルか個々の思想の内面的矛盾によつて、道德的社會の關係に入り、純眞なる愛の世界に達するのである、死することによつて生きるのである。

互に相超ゆることのできない人格的對立の考は、右に云つた様な純眞なる愛の立場、即ち超越的愛の立場から出立せねばならぬ。此の如き立場の對象界即ち道德的社會に於て、各人が獨立の人格たると共に互に一であるのである。我々は一つの人格といふ如きものを考へる時、直に之を對象化して考へるから、之を一つの本體の如くに考へ、多數の人格を單にその部分と考へるのであるが、人格的統一といふことは無限に分化するといふことでなければならぬ。我々が人格的統一といふことは一々の作用が無限に自由となることである、斯くしてその對象界が統一せられて一となるのである。神の人格といふのは本體的に一といふことではなくして、無限なる

人格的分化でなければならぬ、人格的單位でなければならぬ。所謂個人的意識も此の如き意味に於て一つの道德的社會であり、心理的意識統一は此の如き統一の反映である。我々の意識の根柢となる自我は能働的にして個性的である、單に認識的でなく意欲的でなければならぬ。而して人格的統一は本體的統一に反し、多的分化といふことが統一といふことであるから、我々の個人的意識が一つの人格的統一であるには、一瞬一瞬の意識が獨立自由でなければならぬ。自由なる目的其者の結合として我々の個人的意識が成立するのである。我々は單なる知的自覺といふ如きものがあるが、單なる知的自己はカントの純粹自我の如きものであつて、一般的自我に過ぎない、一般的自己は眞の自己でない、自己は個人的でなければならぬ、我々は道德的自覺に於て始めて眞の自覺に達するのである。或は道德的自覺なくとも意識現象はあると云ふ者があるかも知れぬが、向にも云つた如く自覺なき意識現象は一般的主觀の上に立つ意識現象であつて、自然現象とも解し得るものである。此の如き現象が個人的自覺に發展し得るからと云つて、直にそれを個人的意識と考へることはできぬ。我々が普通に之を個人的意識と考へるのは一種の有機感覺によつて考へて居るのである。若し眞に個人的意識と社會的意識との區別を求める

ならば唯道德的個性の創造と自然的因果との結合點に於て求むるべきではないかと思ふ。所謂道德的社會の内容は唯當爲としてそれが直に自然と結合するとは云はれないが、個人的意識に於ては、道德的當爲は直に自然的因果となるのである。